

## 地域文化とカナカマカーン・チュムチョン

ーバンコク都ラートクラバン区リアップ・クローンモーン地域を事例にー

マリー ケオマノータム 牧田 実\*

### はじめに

本稿は、バンコク郊外部のラートクラバン区にあるモン族居住地域であるリアップ・クローンモーン地域を対象に、地域固有の伝統と文化を地域資源とし、カナカマカーン・チュムチョンを中心として住民自らが取り組んでいる地域社会開発の事例を紹介することを目的とする。

リアップ・クローンモーン地域には、モン族固有の伝統文化・行事として、水上ト鉢や舟競争、伝承遊びなどがあり、住民は今日までこれを継承してきている。地域の中心にはラーマ4世のモン人側室が建造したスッターポー寺があり、この寺がモン族コミュニティの文化的な中心となるとともに、水上ト鉢の実施や舟の保存の責任主体となっている。またこの地域には行政によって都立ラートクラバン区地域博物館が建てられ、モン族の伝統と文化を展示するとともに、住民がボランティアでガイド役を務めている。こうした地域資源を生かしつつ、あらゆる行事や活動の中心的な役割を担っているのが、住民組織であるカナカマカーン・チュムチョンである。

以下、ラートクラバン区およびリアップ・クローンモーン地域の概況とカナカマカーン・チュムチョンの概要をふまえたうえで、リアップ・クローンモーン地域の伝統と文化の継承に関わる地域資源のありようを地域住民との関係という視点から整理し、地域アイデンティティの維持と形成に果たす住民組織の役割について、若干の考察を加えたい。

### 1 ラートクラバン区とリアップ・クローンモーン地域の概況

ラートクラバン区は、バンコク東部に位置する郊外区であり、バンコク50区のなかで2番目に広い面積(77,400 ライ=123.8km<sup>2</sup>)を有している。広大な平

野部に農地と湿地帯が広がり、大小の運河が縦横に巡っている。1976年には工業団地(2,515 ライ=4.0 km<sup>2</sup>)が造成され、また近年は幹線道路沿いに新興住宅地の開発が進むなど、急激に都市化が進んでいる地域である。ラートクラバン区の人口は、1995年の89,145人が2010年には157,477人となった。この15年間の人口増加率は77%である。なお、2006年には、隣接するサムットプラーカーン県バーンブリー郡にスワンナプーム国際空港(新バンコク国際空港)が開港した。このため、飛行機の離着陸にともなう騒音・振動のほか、窓ガラスが割れる被害も一部で出ている。また工場排水と新興住宅地の生活排水は運河に直接排出されており、運河の水の汚染が深刻な問題となっている。



写真1 リアップ・クローンモーン地域の概観

リアップ・クローンモーン地域は、モーン運河の両岸に細長く展開する地域である(写真1)。面積3,000 ライ(4.8km<sup>2</sup>)、2011年現在、200家屋があり、200家族1,000人弱が住んでいる。かつては米、野菜、バナナ、マンゴーなどの農業と運河での漁業が中心だったが、現在は工場労働者も多い。農家は30数戸にまで減っている。妻が農業をし、夫が被雇用者というケースも多い。民族的にはモン族の居住地域であり、宗教的にはタイ族と同様、仏教を信仰している。リアップ・クローンモーン地域のモン族は、100年ほど前に隣接する県から運河をたどって移動してきた。

\* 福島大学人間発達文化学類教授

そして、この一帯が豊かな農地となりうることを見越して定着したのが、この地域の歴史の始まりである。現在の世代は入植者の世代から数えてすでに3代目、4代目となっている。親族グループごとに集まって住んでおり、リアップ・クローンモーン地域には全部で10数親族グループがある。モン族はタイ社会に定着して生活しており、タイ人との結婚も多くみられる。リアップ・クローンモーン地域にも多くのタイ人が結婚によって入ってきており、混血化も進んでいる。電気・水道は5年ほど前に完備した。運河沿いには水道がないが、飲料水は井戸で足りている。

## Ⅱ カナカマカーン・チュムチョンの設立と活動<sup>1</sup>

現在のカナカマカーン・チュムチョンの会長<sup>2</sup>は、リアップ・クローンモーン地域がかつて村（ムバーン）だった時代<sup>3</sup>の1990年に25歳の若さで選挙に出て村長になり、そのまま長く地域リーダーの地位にある。村長手当は月額3,000～4,000バーツだったが、村といっても予算があるわけではないので、独自の地域運営をすることはできなかった。このため、チュムチョンとして都の認定を受けることで地域社会開発予算を得ようと考え、1997年にカナカマカーン・チュムチョンを立ち上げた。以後、リアップ・クローンモーン地域では、2004年までは村であり、同時にチュムチョンでもあるという二面的な地域運営がなされた。村の役職者は、村長と村長補佐2名である。一方、カナカマカーン・チュムチョンは当初7名で発足した。現在の委員は9名である<sup>4</sup>。過去に選挙になったことはない。むしろ自ら進んで立候補者する人が少ないので、地域社会開発に対する考え方が近い同世代を中心に会長が声をかけてメンバーをそろえているのが現状である。5年ぐらいで会長以外の委員がほぼ入れ替わるという。

財政的には、月額5,000バーツ（以前は2,000バーツ）の地域社会開発予算では足りないので、住民から4～5万バーツの寄付を募って活動資金にしている。用途は、会議費、食事代や自警団の飲み物代などがおもなものである。

カナカマカーン・チュムチョンの会合は、月1回、会長宅で夕方開催されている。議題は、区役所からの連絡、麻薬問題、運河の環境整備、公衆電話の設置、高齢者の生活、健康診断、保健・衛生のお知らせなどである。高齢者の生活保護費（500バーツ）

については、まず会長が全員分を預かって、本人が健康診断に来たときに、渡すようにしているという。住民への情報の伝達は、地域が運河沿いに5km以上にわたって展開しているので、有線放送の整備ができず、ほとんど口コミで行っている。地域が10数ブロックに分かれており、カナカマカーン・チュムチョンのメンバーが数ブロックずつ受け持っている。

防災訓練を年1回実施する。防犯対策として自警団を組織している。運河地帯なので洪水への備えも必要である。生活排水は直接運河に流れ込んでいるので、水には注意している。汚れた水を流す家は突き止めて注意する。現在の地域問題としては、青少年の麻薬と高齢者のアルコール依存の問題がある。高齢者は自分の役割がなく、手持ちぶさたになると酒を飲んでしまう。カナカマカーン・チュムチョンとして、住宅地図をつくり、麻薬の心配のある家を黒く塗り、糖尿病などの患者がいて、病院への救急搬送が必要になる可能性のある家に赤いピンを立て、日頃から予防と観察に努めている（写真2）。



写真2 要観察世帯に印をつけた住宅地図

内務省管轄の村からバンコク都の管轄のチュムチョンになることによって、チュムチョンの仲間が増え、行政からの援助も増えたという。しかし自分たちの地域のことは結局自分たちでやるしかないことになり変わらない。会長個人としては、行政やさまざまな機関・団体との関わりが増え、多忙になったという。現在は、都、区、保健所、病院、警察などとの関係も良好で、麻薬問題など何かあればすぐに行政に連絡するし、健康診断のための準備や研修への参加などで協力もしている。リアップ・クローンモーン地域に政治家が来ることは減多にない。道路の補修、運河のつまり、街灯、蚊による熱病対策などの陳情は、カナカマカーン・チュムチョンから直接行政にもっていくとのことである。



### Ⅲ リアアップ・クローンモーン地域の伝統と地域資源<sup>5</sup>

#### 1 伝統文化

この地域にはモン式ソクラーン（旧正月の水かけ祭）、水上托鉢、サバー（モン式のコマ）遊び、石蹴り、キャラメルづくりなど多くの独特の行事や文化が伝えられている。

このうち、水上托鉢は、毎年、オークパンサー（出安居）後の最初の日曜日の朝に開催される。100人以上の僧侶が舟で運河を行き、運河の両岸から1,000人以上の人々が僧侶に食物を捧げる行事である。水上托鉢は、スッターポー寺周辺のモン族の仏教信仰を示す行事であり、モン族は次世代が自分たちの地域のかげがえのなさを学び、継承し、誇りを持つことができるように、この伝統を守ってきた。托鉢すなわち100人以上の僧侶に食物を捧げることは、モン族にとって徳を積む行為（タムブン）にほかならない。水上托鉢の日午後には、舟競争が行われる。ここで使われる舟は、住民たちが守ってきた伝統的なタイ式の舟である。生活、仕事、コミュニケーション、移動、商売のすべての場面で舟を用いることがモン族独自のライフスタイルを形作ってきた<sup>6</sup>。

#### 2 スッターポー寺

リアアップ・クローンモーン地域の中心に位置するスッターポー寺（写真3、4、5）は、ラーマ4世（1804-1868年）の側室の一人であったモン人女性グリーンによって建造された仏教寺である。彼女はモン人有力者の娘であり、彼女自身もモン族がタイに定住し、その権利が保障されるように尽力した、モン族にとっていわば恩人にあたる人物である。スッターポー寺は、地方を巡ることを好んだ彼女がこの地域に足を運んだときに祈りを捧げるための礼拝所であり、またこの地域のモン族のために建てた寺でもある。現在、本堂の正面には、彼女の大理石像が記念碑として立てられている（写真6）。

さきにみた水上托鉢もまた本来はスッターポー寺ゆかりの宗教行事である。かつてはこの行事に必要な舟が足りず、周辺地域から借り集めなければならなかった。地域の住民によって構成されるスッターポー寺委員会は、托鉢に招待する100人の僧を乗せる舟をいかに確保するかについて話し合い、2002年、すでに使用されなくなった農業用の舟の寄付を住民に



写真3 スッターポー寺の外観



写真4 スッターポー寺の入り口



写真5 スッターポー寺の広場



写真6 ラーマ4世側室モン人女性グリーンの大理石像

呼びかけた。すると、住民から100艘を超える舟の寄付があった。なかには修理の必要な舟もあり、年々維持費もかさんだが、有志や住民からの寄付を募ってまかなってきた。スッターポー寺の敷地には、舟博物館(写真7)がある。これは舟を保管するとともに、住民が伝統的な舟の歴史を学ぶことができるように建てられた施設である。



写真7 舟博物館に保管されている舟

### 3 都立ラートクラバン区博物館

スッターポー寺の敷地にはバンコク都立ラートクラバン地域博物館がある。区の職員2人が常駐し、受付や清掃をしているが、ガイドは住民のボランティアが務めている。地域博物館は、バンコクの文化遺産とローカルな知恵を保存・展示するためにバンコク都によって都内の各地に建てられている。ラートクラバン地域博物館には、地域の文化、地域の知恵、地域の名所・名物、地域の歴史、地域の名士という5つの展示コーナーがある(写真8、9、10、11)。

### 4 実行主体としてのカナカマカーン・チュムチョン

4月のモン式ソクラーン(水かけまつり)、10月の水上托鉢と舟競争のほかにも、リアップ・クローンモーン地域は、サバー(コマ)遊び、石蹴り、飾り物作りなどのモン族の伝統を継承してきた。これらにかかる費用は住民からの寄付に頼っている。宗教行事であるソクラーンや水上托鉢は住民全員が参加すべきものであるし、また実際に全員が参加している。モン族は行事のときには女性が必ず集まって、手伝いをする。青少年会は、麻薬撲滅のための王室プロジェクトである「TO BE NUMBER ONE 活動」に取り組んでいる。高齢者はお茶飲み会を開いている。そのほか、リアップ・クローンモーン地域には、自警団、保健衛生グループ、商人グループ、農家グループ、文化



写真8 バンコク都立ラートクラバン地域博物館の入り口



写真9 ラーマ4世側室モン人女性グリンの肖像



写真10 ラートクラバン地域博物館に展示されている漁具



写真11 水上托鉢について説明するラーマン会長



グループなどがある。そしてこうした組織の母体となり、地域活動のすべてを統括しているのがかつての村の伝統を今日に継承するカナカマカーン・チュムチョンである。

#### IV 考察：地域アイデンティティとカナカマカーン・チュムチョン

リアップ・クロンモーン地域のカナカマカーン・チュムチョンは、地域文化を継承し、これらを資源として生かした地域社会開発に主体的に取り組んできた。さいごに、この地域活動を支える条件を、地域資源、主体、意識という3つの視点から整理し、むすびにかえたい。

第一は地域資源であり、リアップ・クロンモーン地域には大きく3つの要素がみられる。ひとつはモン族に固有の文化と伝統行事である。これはタイ社会において、ユニークな地域資源となりうる。また仏教という大きな宗教的基盤を共有するだけに、タイ社会に受け入れられやすいという面もある。ついで、スッターポー寺の存在である。リアップ・クロンモーン地域において、スッターポー寺は、住民の日常的な信仰の対象として心の拠り所となるとともに、水上托鉢など地域をあげての宗教行事を提供し、住民統合の要となっている。さいごに、行政の支援をあげておきたい。バンコク都によって設立されたラートクラバン区博物館は、リアップ・クロンモーン地域の文化と歴史の蓄積を集約、可視化し、住民や観光客に目に見える形で提示している。またラートクラバン区は、ガイドブックでの紹介をとおして、観光地としてのリアップ・クロンモーン地域の紹介にも力を入れている。

第二に、主体という視点からみるならば、住民を統合するナカマカーン・チュムチョンの存在がある。とりわけ、リアップ・クロンモーン地域の場合、かつて村（ムバーン）でもあったという経緯もあり、カナカマカーン・チュムチョンの組織的基盤はきわめて強固である。さまざまな住民組織の母体として、またあらゆる地域活動の担い手として、リアップ・クロンモーン地域の中心には常にカナカマカーン・チュムチョンがある。

第三に、住民の意識に注目するならば、リアップ・クロンモーン地域に独自のローカリズムの存在を指摘することができよう<sup>7</sup>。モン族の誇りと郷土愛が結

びつくところに成立するのがこのローカリズムであるとするならば、このローカリズムは、モンスタイルの文化や行事をとおして醸成されるものであり、また同時にモンスタイルの文化や行事を支える原動力ともなっている。

リアップ・クロンモーン地域の地域活動はこうした要因によって支えられているとみなすことができる。しかし、モン語の継承が危機的状況にあるように、今日の生活に必ずしも密着しているわけではない伝統文化を継承していくことには、かなりの努力を要することも事実である。労働者・学生として地域外へ通勤・通学し、地域を離れる若者も多く、タイ人との混血化も進むなかで、リアップ・クロンモーン地域が将来にわたって強い統合を保ち、伝統文化を継承していけるかどうかは、カナカマカーン・チュムチョンが住民意識のうちに民族的誇りと郷土愛を醸成し、ローカリズムを喚起し続けることができるかどうかにかかっているといえよう。

<sup>1</sup> 聴き取り調査は、2011年8月11日に実施した。

<sup>2</sup> 会長は、元軍人で、現在は建設関係の人材派遣業を営んでいる。民主党支持者。父親も軍人だったという。

<sup>3</sup> 1985年地方自治体としてのバンコク都が成立したが、周辺農村部については2004年まで従来の地方行政制度が残存しており、リアップ・クロンモーン地域は村（ムバーン）であり続けた。

<sup>4</sup> カナカマカーン・チュムチョンの2011年現在の役職構成は、会長（男性、47歳）、副会長（男性、3期目、47歳）、書記（男性、1期目、45歳）、会計（女性、2期目、38歳）、登録係（男性、2期目、47歳）、広報渉外係（男性、3期目、40歳）、総務係（男性、1期目、40歳）、統計係（男性、1期目、40歳）、一般委員（女性、1期目、40歳）である。

<sup>5</sup> リアップ・クロンモーン地域の文化と行事に関しては、聞き取りのほか、ラートクラバン区（2009）を参照した。

<sup>6</sup> 伝統文化の継承として重要なのは言葉だが、残念ながらモン語ができる人は一部の僧侶ぐらいだとのことである。

<sup>7</sup> リアップ・クロンモーン地域の水上托鉢に参加するという視点からフィールドワークしたNAVAMON（2011）は、住民による参加の意思決定をローカリズムの概念によって説明し、参加は郷土愛と民族的誇りによって規定されると論じている。

#### References

- Lat Krabang District (2009) *Guidebook of Lat Krabang Concerning Local Custom and Culture* : Lat Krabang District Office, Bangkok.

Navamon, Udomrat (2011) “A Study of People’s Participation in the Conservation of Boat Almsgiving Tradition : A Case Study of Klong Mon Community, Tap Yao Sub-district, Lad Krabang District, Bangkok” M.A. Thesis, Graduate School of Chulalongkorn University.

[付記] 本研究は、平成 22-24 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）「タイ都市社会の変容と地域住民組織」による成果である。

# **Community Culture and *Khanakammakan Chumchon* :**

## **Case Study of Liap Khlong Mon Community, Lat Krabang District, Bangkok**

KAEWMANOTHAM Malee and MAKITA Minoru

### **Abstract**

This paper introduces community development in Liap Khlong Mon, a Mon ethnic community in Lat Krabang District in the suburbs of Bangkok, initiated largely by the residents themselves through community-based *khanakammakan chumchon* (community committee) activities. The Mon ethnic community at Liap Khlong Mon continues to observe traditional Mon culture and observances right up to the present day as attested by the Buddhist tradition of water-borne mendicant begging, traditional boat races, and distinctive Mon folk sports and games. This paper examines some of the conditions supporting community development through *khanakammakan chumchon* activities from three perspectives: community resources, residents' subjectivity, and community consciousness.

(2012 年 11 月 1 日受理)